

琵琶湖に初めて蒸気船が浮かんだ

「一番丸」の誕生

「近江国」おうみのくにはその名のごとく琵琶湖水運を中心に成立していた国です。

近江八景の一つ「矢走の帰帆」に詠まれているようにかつて多くの帆船が帆をいっぱいにして張って湖上を行き来する琵琶湖ならではの美しい景色に恵まれていたと同時に、地政学的にも我が国のほぼ中心にあつて、日本海と太平洋を繋ぐ水運の戦略的要衝の地でもありました。

八世紀になり首都が平安京に遷うつされると琵琶湖水運の重要性はいやが上にも増し、都と地方を繋ぐ物流の大動脈となったのです。戦国時代は大名達の天下取りの夢舞台でもありました。豊臣秀吉は湖上水運の機能を強化するため拠点を作り、堅田から大津へ移し「大津百艘船」を創設、特権を与えて湖上水運の秩序を創り上げたのです。近世を通して琵琶湖の貨物と旅客を独占していたのは丸子船と呼ばれる帆船でした。

近江商人が開発した蝦夷地との交易も敦賀で陸揚げされたニシンや昆布を初め、日本海の物産、年貢米なども深坂峠を越えて琵琶湖北端の塩津や大浦、海津の港から坂本・大津港へ丸子船で搬送され、そこから水陸両ルートで京都・大坂へ届けられていたのです。

江戸時代末期には千四百隻もの大小の丸子船が湖上を帆走していたといいますが、すからさぞ壮観だったことでしょう。大津湖岸には物流の拠点として諸藩の蔵屋敷が軒を連ねていて、活気溢れる港町だったと伝えられています。その琵琶湖にも大きな変化が起ころうとしていました。

東インド艦隊司令長官ペリーが米大統領の国書を携えて幕府に開国を迫るべく、三本マストの軍艦四隻（うち二隻は蒸気船）を率いて江戸湾深く浦賀沖に姿を現したのが嘉永六年（一八五三年）六月のことでした。

煙突から黒煙を吐きながら進む「黒船」（蒸気船）の威容を始めて見た幕府・諸藩はもとより、一般市民も驚きと強烈な威圧と恐怖を覚えたのです。

「泰平の眠りを覚ます上喜撰たった四杯で夜も寝られず」と狂歌に詠われたように上も下も天地がひっくり返るような大騒ぎになった様子が分かります。

（注・・・上貴撰↓高級宇治茶のブランド名・・・蒸気船に引っ掛けて詠んだ）

これが翌年の「日米和親条約」につながり、二五〇年続いた徳川幕藩体制の崩壊の序曲、「幕末」の始まりでした。現に黒船出現から十五年の後、明治維新によって徳川幕府は大政を奉還し、統一国家「日本国」が誕生（一八六八年）したのです。

黒船来航以来、幕府はもちろん薩摩・加賀・佐賀等の雄藩はこぞって海軍の強化に取り組み、蒸気船の輸入や研究・建造に着手しました。京都御所朔平門さくへいもんの警

護を命ぜられていた加賀大聖寺藩（加賀藩の支藩）^{かがだいしょうじ}も例外ではありませんでした。琵琶湖岸の海津に飛び地を有していた同藩は御所警護と共に藩米を貯蔵する蔵屋敷を所有していたこともあって、海津と大津港間を帆船で往来する機会が多かったのです。大聖寺藩の藩士であり蘭学者であった石川嶂^{たかし}はかねてより「今のような貧弱な船でどうして禁裏^{きんり}の守護が出来ましょうか、蒸気船の建造が必須である」とする建議を提出していたのですが、採択されることはありませんでした。

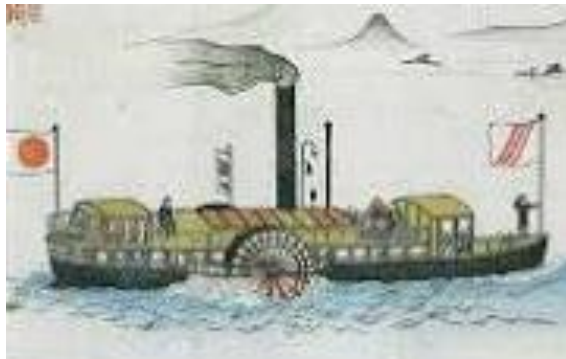
石川は「大津百艘船の間屋」筋にも蒸気船建造を呼びかけるのですが反応は乏しかったようです。唯一、衰亡著しい「大津百艘船」の将来に強い不安を抱き、瓦版で知った蒸気船来航に強い衝撃を受け、蒸気船導入によって琵琶湖の水運再建を唱える一庭啓二^{いちば}（大津百艘船の一員である回船問屋へ入り婿）と出会い忽ちにして意気投合し目的は違うが、蒸気船建造に命を懸ける盟約を交わしたのです。石川二十八歳、一庭二十二歳のことでした。

「我が三藩北陸に雄居ス、一旦京師ニ警アルニ際リ勤皇ノ兵先駆ヲ他ニ譲ルベカラズ、今日予メ湖上ニ汽船ヲ浮カベ緩急ニ応ズベシ」と迫る二人の真剣さと情熱に心を動かされた藩の上層部もついに内諾を与えるに至ったのだと思われる。（諸説あるが筆者は、岡村敬二著「一庭啓二の生涯」の説を採用）

内諾を得た二人は長崎へ飛び、一庭は長崎にある加賀藩伝習所で杉山徳三郎

から造船と蒸気機関学を学び、石川は加賀藩の長崎海軍奉行の稲葉助五郎に会い熱心に蒸気船の必要性を説いたといひます。稲葉は二人の熱心さに心動かされ建造資金を貸し与えたのです。二人はこの金で陸用の蒸気機関を二基をイギリス人から購入し、熟練の鉄工職人や船大工数名を大津へ連れて帰り、蒸気船建造の準備に取りかかりました。

このような経過を辿って翌慶応三年（一八六八年）、ようやく加賀大聖寺藩から蒸気船建造のために一二五〇〇両（現在価値に換算すると約一億円）が正式に出資されることになったのです。



大聖寺藩は大津に汽船局を設置し大津造船所の建設に取り掛かったのです、完成するや蒸気船の突貫工事が始まりました。明治二年三月三日（木造外輪

船・長さ十六・三m×幅二・七m、重量十四トン、十四馬力の蒸気船が進水を果たしたのです。名前は「一番丸」（スケッチ写真参照）と名付けられ、船長は一庭啓二が大聖寺藩に藩籍を得て就任したのでした。

ところが、びわ湖の各浦にある旅籠屋や回漕問屋等からは蒸気船の就航に反対する声が想像以上に強く、妨害行為も度々でしたが、石川と一庭はこれにひるまず二番丸の建造計画に取りかかりました。明治二年十月、明治政府（民部省）

は大聖寺藩の増船を認め、反对者に対しては「文明開化につれて改業・転職の道もあり、申し立て通りに取り計らうものではない」と異議申し立てを却下したのです。

蒸気船の話が瓦版を賑わし、蒸気船が帆船を次々と抜き去って行く現実の姿に感嘆の声を上げる一般市民に押されて、これまで反対をしていた各浦も一番丸・二番丸の寄港を求めるようになりました。明治七年までの五年間で十九隻の蒸気船がびわ湖各地に誕生し大勢は決したのです。

明治十五年（一八八二年）、北陸鉄道の開通によって約千年もの永きにわたって続いた「びわ湖水運」も結局は歴史の幕を閉じることになるのですが、蒸気船の就航は「観光・教育」という新しい事業分野を開拓することになり今日に至っています。

「一番丸」の歴史もこれで終わったわけではありません。

平成九年（一九九七年）、大津の^{もくべい}李兵衛造船所で三〇年ぶりに復元され、現在「新一番丸」（写真）として、おごと温泉港～石山寺港間を「瀬田川クルーズ」として定期運航し人気を集めていると聞きます。

歴史とは偶然と必然が作る人の邂逅が織りなす絵巻物なのでしょう。石川嶂と一庭啓二の場合もそうで



あったに違いありません。二人の親交は生涯にわたって続いたと記録にあります。いつの時代も「時代を開くのは才能と情熱を持った若者」なのです。